1997年12月15日発行（隔月刊）

うは化が

1997年12月
第 5 号

横浜漢点字羽化の会
〒231 横浜市中区山元町2-105　Tel 045-641-1290
発行責任者　代表　岡田 健嗣
編集責任者　宗助 悦子

テーマ：『一年を振り返って』

目　次

連載「EIBRK 漢点字変換システムについて」(5) ・・・・ i (中央)
テーマ：「一年を振り返って」 ・・・・・・・・・・・・・・ 1
漢字を学ぶ楽しさ（小学校教師　伊藤邦博） ・・・・・ 7
点字と私（賛助会員　小川宣二） ・・・・・・・・・・・ 9
連載「点字から識字までの距離」(4) ・・・・・・・・・・ 11
ご報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
漢点字ってどんな字？　4 ・・・・・・・・・・・・・・・ 15
同報通信『雑談』より　3 ・・・・・・・・・・・・・・・ 17
連載マンガ「となりのシロー君」(4) ・・・・・・・・・・ 21
代表インタビュー　5 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

テーマ『一年を振り返って』

皆様のご支援の元、大きな成果と共にこの一年が過ぎようとしております。深いご理解ご支援をいただきありがとうございました。

一年間の活動のご報告として、この一年を振り返ってみました。

〔九七年の出来事〕

一月　本会のマーク決定

一五日　漢点字版隔月刊誌「横浜通信」一七号発行

二月　漢点字版『漢字源』製本開始

三月　三日　朝日新聞　横浜版掲載

一五日　漢点字版『漢字源』の横浜市中央図書館への譲渡式開催

一六日　神奈川新聞　地域総合版掲載

一七日　朝日新聞　神奈川版掲載

一九日　テレビ神奈川「日本大通り情報～ともしびレポート」放映

二〇日　漢点字版隔月刊誌「横浜通信」一八号発行

三〇日　神奈川新聞　地域総合版掲載

四月　九日　神奈川新聞　よこはま瓦版掲載

一〇日　NHKテレビ各地のニュースにて報道

一五日　墨字版機関誌「うか」創刊号発行

横浜市社会福祉協議会ボランティアセンターによる漢点字専用プリンタの購入・設置

六月　漢点字版隔月刊誌「横浜通信」一九号発行

七月二〇日　テレビ東京「追跡！テレビの主役」に出演

八月　六日　漢点字版隔月刊誌「横浜通信」二〇号発行

九月一〇日　草野仁氏による「女性セブン」の連載エッセイに掲載

一〇月　二台目の漢点字プリンタ設置

一一月　五日　録音奉仕団「やまびこ」様のご協力によるテープ版機関誌「うか」発行

五日　漢点字版隔月刊誌「横浜通信」二一号発行

〔その他の活動〕

定期購読　朝日新聞掲載「朝日歌壇・俳壇」漢点字訳

朝日新聞掲載「内視境」等健康記事の漢点字訳

理療科国家試験問題等、依頼による墨字原稿の漢点字訳

その他書籍の漢点字訳を作成中

この一年を振り返って

代表　岡田　健嗣

昨年の一月三〇日、本会としては初めて、ボランティア活動にご参加いただける会員を募集致しました。沢山の皆さまからご応募いただきました。

それから早二年が過ぎようとしております。漢点字変換システム EIBRK をご開発下さいました木下さまを初め、会員各位の熱意ある活動と、積極的なご発意が、会をこれまでに育てて下さったものと、心より御礼申し上げます。

本会の今年を振り返りますと、そこには幾つかのポイントが挙げられると思われます。以下箇条に分けてご報告致します。

1. 漢点字版『漢字源』の完成

何と申しましても今年のエポックは、漢点字版の『漢字源』を完成して、横浜市中央図書館に納入したことだと思います。

昨年の秋より、木下さまを中心にして、横浜国大の村田忠禧教授のご尽力で学習研究社からご提供いただきました、同社の「電子ブック版『漢字源』」の電子データを使っての、漢点字版の製作に入っておりました。

年が明けて、製作手順も定まり、木下さまのお宅に設置していただいた漢点字打ち出し用のプリンター、エヴェレストもフル起動するに至り、打ち出された用紙を製本するという一連の作業に入りました。

このような作業は、ほとんどの会員にとって初めての経験でしたが、事前の準備のよろしきを得て、見事な出来映えの九十巻が完成しました。

三月一五日、横浜国大の村田先生、市会議員の大滝正雄先生、そして市中央図書館の福地課長、石田係長のご臨席を仰いで、完成したばかりの同書九十巻の譲渡式を、神奈川県ライトセンターを会場に行ないました。当日はあいにく雨もよいのお天気でしたが、予定通り無事中央図書館の蔵書として受け入れていただくことができました。図書館の両氏には、深く御礼申し上げます。同書は、視覚障害者向けの日本に一組しかない漢和辞典として、現在は同館の書架にあって、視覚障害者の皆さまのご利用をお待ちしております。

この模様は、テレビ神奈川の『日本大通り情報〜ともしびレポート』という番組に取り上げていただき、三月一九日に放映されました。漢点字の存在を一般の皆さまにもご存じいただければと、祈る思いで番組作りにお応えしました。司会者の大森黎様、テレビ神奈川のスタッフの皆さま、誠にありがとうございました。

2. 横浜市社協に、漢点字打ち出し専用プリンターが導入されました

かねてより公的な機関での漢点字の採用を要望して参りましたが、この五月、横浜市社会福祉協議会に、漢点字打ち出し専用の点字プリンターを設置していただくことになりました。神奈川県内では、神奈川県ライトセンターで打ち出しのサービスをお願いして参りましたが、今回は本会の会員が直接プリンターの操作を行なって、漢点字の資料を製作することになります。これによって、神奈川県内の公共の施設では、二箇所で漢点字の資料が製作できることになりました。しかも、本会の活動の拠点的な場として、市社協ボランティアセンターの受発送室（プリンターの設置してある部屋）を使用させていただけることにもなりました。このことは、本会の活動にとって、これ以上にない恩恵と、市社協を初め、関係各位に深く御礼申し上げます。それとともに、会員の皆さまと手を携えて、活動の今後の方向性を、心を改めて探って行かなければならないものと考えております。当面本会では、月刊で発行して参りました朝日歌壇・俳壇と、新聞の健康記事は、引き続きライトセンターで打ち出しをお願いして、その他の資料を社協で打ち出すことにしておりますが、ニーズの増大等、予想される変化に伴って、その方法も検討の課題となって行くものと思われます。また、このプリンターは公共の備品ですので、他のボランティアの皆さまや、視覚障害者の皆さまにも使用していただけるよう、整備して行きたいと考えております。

3. 機関誌『うか』の発刊

本誌『うか』を、本会の機関誌として発刊することができました。また、録音奉仕団「やまびこ」さまのご協力を得て、第四号より、テープ版も発刊できる運びとなりました。

本会の機関誌として、会員相互の交流に、外部の皆さまへのＰＲに、とりわけ会員並びに視覚障害者とを結ぶメディアとして位置付けられるよう育てて行きたいと考えております。

4. 市中央図書館への納入書が決まりました

『漢字源』の製作納入を完了して、新任の中央図書館の新谷課長と永井係長両氏と、今後受け入れていただける漢点字書についてご相談して参りましたところ、既報の通り、『短歌　俳句　川柳　１０１年』（新潮一九九三年臨時増刊）と、『侏儒の言葉』（芥川竜之介　岩波文庫）が選ばれました。来春三月を目標に、製作する予定です。両氏を初め図書館の皆さまに御礼申し上げますとともに、今後とも視覚障害者の読書環境の向上を、視覚障害者自身に求めることも含めて、ご尽力いただけますことをお願い申し上げます。また

両氏は、本誌『うか』三号、四号に原稿をお寄せ下さいました。深く御礼申し上げます。来年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

5. 漢点字訳書、続々完成へ

会員の皆さまには、昨年からご参加いただいて参りましたが、当初から取り組んでいただいておりますものが、続々完成に近付いております。

圧巻は、読者のニーズとして頂戴いたしました『あんまマッサージ指圧師、はり師、きゅう師、国家試験各課の要点』（医歯薬出版　本文一〇巻）です。理療科の手引き書として、よくまとめられているものです。盲学校の理療科の先生方、国家試験の受験生、もう一度復習しようと意欲的な皆さまには、打って付けの本ではないでしょうか。来春早々には配本予定です。

他にも数点完成目前の書籍がございます。これらは、本会の独力で、打ち込み、校正、編集から、打ち出し、製本まで、初めて行なうものです。すなわち、本会としては、総合的な活動の成果と言えるものです。

また、朝日新聞に掲載の「朝日歌壇・俳壇」と、「内視鏡」などの健康記事も、引き続き月刊で希望者にお送りしております。同様に、「横浜通信」は、隔月の発行を目標に、模範的な文章、言葉に関わる記事等、読むことに積極的になっていただきたい願いを込めて製作しております。

しかしながら、右のようなニーズに基づいた製作は極僅かですので、読者の手許にお届けすることが叶わないものもございます。読者からの要望を広く求めて、既に完成、あるいは完成見込みのものを含めて、ＰＲにより一層努めて行かなければならないと考えております。

6. マスコミに取り上げていただきました

三月の『漢字源』譲渡式には、テレビ神奈川の取材を受けました。同様に、四月五日、ＮＨＫの取材を受け、同一〇日、ニュースの時間に放映されました。

七月には、テレビ東京の「追跡！テレビの主役」という番組への出演が決まり、取材がありました。同二四日、スタジオでの収録があり、八月六日に放映されました。

また、新聞雑誌等活字メディアにも取り上げていただきました。これらの詳細は、バックナンバーをご覧下さい。

いずれも大変好意的に取り上げていただきました。各社のスタッフの皆さまには、深く御礼申し上げます。点字に関しての一般のご理解も、少しづつ変化し始めたように感じております。

以上、今年一年を振り返ってみました。

来年は、多くのニーズに基づいた活動にして行きたいものと願っております。

一年を振り返って

会員　雨宮　絢子

今年は会に取って飛躍の年でした。2月から漢字源の製本に始まり3月に横浜市中央図書館への譲渡（お陰様で製本を勉強させて頂きました）、桜木町の社会福祉協議会に拠点が設けられた事（点字プリンター付きで）、「うか」の機関誌の発行及び視覚障害者向けの本誌のテープ化（朗読ボランティアグループ「やまびこ」さまのご協力を得て）、当会の漢点字変換ソフトのEIBRKも高度になってきましたので、その勉強会等大変有意義な年でした。

又、会計ソフトも作って頂きました。

私事では、母が1年の間に2回も入院したりで忙しい日々を過ごしていました。が、その合間をぬって私には予想だにしていなかった事がありました。テレビ出演です。だいたい人前で話す事が苦手で3月の漢字源の中央図書館への譲渡式を神奈川テレビ局の方がインタビューなさり始めたら、逃げていました。それがこちらから出向くとは。放映後、町内会の方や中学の友人、習い事の仲間達からお電話なり直接言われたりと驚きました。

来年1月から製本が待っています。益々忙しくなりそうです。

一年を振り返って

会員　木下　和久

漢点字の岡田さんと出会ってほぼ二年、そしてEIBRK 漢点字変換システムの開発を始めてからも同じ年月が過ぎました。ようやくこのごろになって、このシステムもほぼ完成したといってよいような状態になりました。厳密にいうと、まだ本当の完成ではありません。変換後の校正にはいろいろ便利な機能が期待されます。そのいくつかは、時々の要望によって実現してきましたが、なかなかこれで完璧だというようにはならないようです。いま、「検索」の機能を付加することが宿題として残っています。すでに一部のプログラムには作ってあるものなので、そんなに難しいものではなさそうですが、なかなかその作業に着手する時間がないのが現状です。

最も大きな課題は、WINDOWS 版の EIBRK を開発することです。これは、一つの画面に変換された点字と、元のテキスト文を同時に表示しなければならず、標準的なプログラムの形式から外れています。そのために、新しい方法を模索しなければならないので、本格的な着手ができないまま時間がたってしまいました。

一年前に完全に退職し、時間的には余裕があるはずなのに、結構いろいろな役をしなければならず、時間の捻出に頭を悩ましています。退職すると、時間を持て余して困っている方が多いようですが、このような現状であるということはありがたいことだと思っています。

今年を振り返ってみると、去年の暮れから始まった漢字源の製作が、まず大きな課題でした。何しろ初めてのことばかりです。本格的な製本のやり方なんて見たこともないのに、何とかできるでしょうと請け負って、それからライトセンターに勉強に行ったり、資料をもらって勉強したりで、何度も試行錯誤の末に、やっとそこそこの作品ができるようになりました。会員の皆さんの協力も大きな力になりました。全九十巻の漢字源が、横浜中央図書館に無事納められたことは、羽化の会の最大の成果でしょう。

「漢字源」の完成が原動力になったのでしょうか、それからテレビの収録に関係したり、桜木町の社協が点字プリンターを買ってくれて、活動の拠点が確保できたりと、羽化の会が広く認められ、運が向いてきたような気がします。

一年を振り返って

会員　宗助　悦子

会にとっては、大きな成果のあった一年でしたが、私にとってこの一年間は、機関誌「うか」の創刊です。

思えば昨年の夏、機関誌の話が出た時に深く考えず、簡単に機関誌の編集責任を引き受けてしまったのでした。「季刊」か「隔月刊」かを考えるときも、「隔月刊」の方がいいのではないかと答えたのは私だったような気がします。以来、気が付くと次の号の準備をしなければならないという生活が続いています。

「原稿が集まるだろうか？」「次の号も発行出来るだろうか？」と毎号の様に心配しておりますが、皆様の暖かいご協力により、無事5号を発行することが出来ました。この場をお借りして御礼申し上げます。

編集責任とは名ばかりの、ただ集まった原稿をありがたくページに割り振りしている私ではありますが、来年こそは、他の方々のご協力に報いるべく、何かまともな原稿を書きたいと思っております。

とはいっても、今回私が使えるスペースは、たった半ページでしたが…

来年も困る位、原稿が集まることを祈りつつ…

漢字を学ぶ楽しさ

小学校教師　伊藤　邦博

横浜漢点字羽化の会が作成した漢点字訳「漢字源」を横浜中央図書館で見せていただいてきました。学習研究社刊の藤堂明保編「漢字源」一冊が漢点字に訳すと何と九十冊にもなり、それを全部横に並べると五メートルに及ぶものとなることに圧倒されました。一冊の辞書が5メートル、その膨大さに驚き、次にこれを作ろうとし、見事に作り上げた羽化の会のメンバーの皆さんの執念に心打たれました。

係の方に書架から取り出してもらい、読めない漢点字を指で辿っていると、視覚障害者の皆さんの漢字を学びたいという意欲と、漢字から見放されてきたことへの無念の思いが聞こえてきました。

日本語は表音文字の平仮名とカタカナ、表音と表意の働きを合わせ持っている漢字で構成されています。羽化の会の皆さんの目指すものは、視覚障害者も日本語の文字と文字の持つ世界を獲得することによって、晴眼者のように日本語を正確に理解し、読書を楽しみ、自分を発見し、さらに豊かに表現する能力をつけたいということだろうと考えました。

〜私たちは漢字を学びたい。だが、従来の点字は表音文字としての平仮名だけしかない。漢字は法則的に作られてきた文字である。漢字を学ぶにはその法則に則って造られたことを知りながら学ぶ必要がある。そうすれば漢字を学ぶことが苦痛にならずに、知的好奇心を満足させながら同時に楽しく学べるはずである。幸い、普及はしていないが法則に則って川上泰一先生が完成させている八点漢点字がある。これを学ぶことが最も効果的である。八点漢点字を学習するためにはどうしても漢点字訳「漢字源」が必要だ。漢点字訳「漢字源」を作らなければならない。何としても作ろう。〜　漢点字訳「漢字源」を作ろうとした方の切ないまでの思いで、胸が熱くなりました。

羽化の会第4号の編集後記に横浜中央図書館に漢点字訳書籍の2冊として『俳句・川柳一〇一年』と芥川竜之助の『侏儒の言葉』が受け入れられることが書かれています。漢点字に訳された書物で読書できなければ、漢点字を学ぶ意味は大きく後退してしまいます。漢点字訳「漢字源」作りから、漢点字訳の書物までも自分達の手で作ろうとする仕事に尊敬の念を抱きました。

私は東京の下町で小学校教師をしています。私には漢字にまつわる忘れられない体験があります。

七、八年前のことです。家族と友人で伊豆を旅行しました。下田の南の弓ヶ浜に宿をとり、そこに二泊しました。二日目、皆で宿から南伊豆の春の海岸をひがな一日散歩しました。海岸線に沿って設置されている遊歩道を歩きました。山道、松林の道、磯、砂浜と変

化に富んだ道を辿りながら、途中で子魚や海草を見つけたりしながらのんびり歩きました。潮騒の音を聞きながら、松林ごしに垣間見える海を眺めながら歩いていると、突然海に突き出た岬に飛び出しました。水平線が目の前に広がり、右手に太平洋に突き出た石廊崎がぼんやりと見えました。岩の上に小さな案内板が立っていました。「盥岬」、振り仮名がふってあり「たらいみさき」と記してありました。私は「盥」という字を知りませんでした。

ちょうどその頃、私は新しい漢字教育の勉強を始めたころで、この旅の少し前の学習会の席上で「学」旧字は「學」であり、學はもともと昔の漢字で書くと凜となり、分解して考えると槇（両手）と遙（家）と子（子ども）と瑤（コウでその意味はメンズハウス）で構成されている会意文字であり、意味としては男の子が建物の中で大切なものを自らの手でつかみ取るという意味であることを私は師から教わったばかりでした。

「盥」を分解して考えてみました。槇（両手）と水と皿が組み合わさってできている字で、皿（たらい）に水を入れて両手を洗っている、あるいは皿（たらい）に水を入れて両手でなにかを洗っているから、読みは「たらい」で、なるほどと納得しました。家に帰り字源を調べてみたらその通りでした。その時に盥という漢字をしっかり覚え、現在に至るまで忘れていません。別な日には、教育の「教」（旧字は熙）の字についても教わりました。この文字は瑤（コウで意味はメンズハウス）と攵（むちづくり）と子でできた会意文字で、意味するところはむちを片手に男の子に強権的に教え込むこととなります。今の学校を象徴しています。日本の学校は明治以来字源通りに「教」えこまれる場所であり、子どもが自ら「学」ぶ場所にはなっていないことを漢字を学ぶことから再認識しました。子どもが「教」えこまれる場所から、自ら「学」ぶ場所に学校をかえていかなければと考えさせられました。

このように漢字は分解して考えれば、意味をつかんだり、読んだりすることができます。「教」や「学」のように思わぬ発見に驚かされることもしばしばあります。

新しい漢字教育を勉強する中で、私は漢字を作り出し、必要に迫られてその数を増やしてきた古代の中国人の知恵に感心させられました。字源を知り、漢字が構成原則に則って造字され、その数を増やしていったことを理解すれば、漢字はワクワクしながら学べ、身につけていけるものだと確信しました。さらに古代の中国の人々の暮らしや文化も学ぶこともできました。中国から伝えられた漢字を取り入れ、日本語に合致させながら日本語に定着させた私たちの先人の努力を知ることもできました。

漢字の字源や構成の法則などを知れば、漢字を学ぶことは本当に楽しいことです。

点字と私

賛助会員　小川　宣二（のぶつぐ）

私と点字との出会いは、はるか半世紀前、昭和十八年にさかのぼります。当時、私は中学校（旧制五年）を卒業、東京の某専門学校に通っており、たまたま車中の座席に置き忘れてあった新聞を手にしたところ、〝失明勇士（軍人）へ心の糧、よい本を點字で贈れ〟という見出しを目にしました。興味を覚えて記事を詳しく読みますと「点字は決してむずかしいものではない。点字奉仕会という団体が点字講習会を開いているので、皆さん参加してください」という内容でした。

幼い頃から宗教的雰囲気に育った私は、何か世間や人のお役に立つことができればという気持ちを常々抱いていたことと、自分もやがては軍隊に召集され、目が見えなくなる傷を負うかもしれない（死ぬのはごめん）のだから、半分は自分のためにもなるのではないか…という思いで、講習会に申し込んだのでした。

受講料は無料ですが、一日約三時間、延べ十日間の勉強実習は相当に辛かったのを今でもかすかに憶えています。夕刻、勤めや学校から駆けつけた人々は皆、疲れも忘れて真剣に熱心に学習しました。今と異って点字板などは容易に入手できず、各自ボール紙で点字枠を手造りして練習したのです。一通り書ける（打てる）ようになり、修了証もいただきましたが、実際に点字の手紙を失明軍人に差しあげたり、点訳本をまとめる機会は無く、自分も軍隊生活に入ることになったのです。内地勤務のうちに敗戦となり復員帰宅いたしました。戦場へは行かず、視力を損うことはありませんでした。

時は移り、「点字」のことなど、テンデ忘れていた一九六〇（昭和三五）年頃だったかと思いますが、某宗教雑誌の「読者のひろば通信欄」で、〝点字の手紙で文通をして下さる方はありませんか〟という希望の申出があるのを見ました。Y・Y、三〇歳、盲女性…

ハッと、十数年前の経験を思い起こし、古い書類箱から、かつての講習ノートを見つけ出し、復習してみると、何とか覚えていて少しは自信がもてました。しかし点字板も用紙も持っておりません。幸いに近所で、点訳奉仕をしている人がありましたので、そこで点字板をお借りするとともに、実際に書いたものを検閲、校正してもらいましたら、どうやら合格しました。

昔とった〝杵柄〟〝ならぬ〟点筆〟が役に立ちそうなのを喜んだ日のことも鮮やかに憶えております。

そうして、前記のY・Yさんとの文通が始まり、ご

当人の「宗教的疑問」や「家庭生活上の悩み」などに、私なりの解答や助言を伝えることができたのです。

ひとまず、お役目を果たした形で、しばらく音信は途絶えておりましたが、幸福な結婚（お連れ合いも視覚障碍のマッサージ業）をして、お子さんにも恵まれていることを、最近の年賀状で知ることができ、嬉しく思いました。

更に今から五、六年前、一九九〇年代に入って、近くの公民館での点訳サークル〝デコボコ〟の点字講習会に参加し、再研修をいたしました。マスあけ等、いくらかルールの違いはありますが、カナヅカイの場合、点字では昔から表音式でしたから殆んど苦労せずに受講は終りました。

その点訳サークルでは、某コーラス（メンバーに視障者を含む）の歌詞点訳をしたり、講師の知り合いの人の俳句集の点訳などを手分けして引受け、ささやかながらサービスすることができたのも嬉しく懐かしい経験でした。

また一方、「ひまわり号」といって、心身障碍の人やその家族と共に友情列車を走らせるグループにも関係がつき、その委員会などで、必要に応じて、委員会のレジメとか、総会の資料の点訳の仕事もさせていただいております。

その他、個人的には五人程の知友と時折点字文の便りを交信しており、点字の年賀状も毎年数枚受けとっております。

さて、今年になって、新聞で「漢点字」に関する記事を目にしました。漢点字については以前から図書館などで目に触れていましたが、何となくむずかしそうで、とりつきにくい感じをもっておりました。この新聞記事を通して漢点字にも、いくらか親しみをおぼえるようになりましたところ、フトしたご縁でこの「羽化」を愛読するようになったのです。

いまのところは、漢点字を正式に習い覚えるというまでには程遠い（生活上、時間や気持の余裕に乏しく）状態ですが、この羽化を通して門前でおこぼれをいただきつつ、少しずつでも養っていただけるのを楽しみにしております。

先日Y新聞投書欄に「点字入り名刺の普及を望む」と〝I県のある町で名刺に点字を打ち込む運動がすすめられている〟事を紹介し、〝点字入り名刺が障碍者と健常者の間の垣根を取り払う一助になればいい〟との願いが掲載され、私も共鳴しました。私は名刺に自分で点字を打ち込み、常時数枚携行しています。「漢点字」が普及し、名刺にも「漢点字」が使われるようになれば、更に有効・便利になることでしょう。

連載

点字から識字までの距離（四）

山内薫（墨田区立緑図書館）

羽化の会の代表である岡田さんが以前「従来の仮名点字は右手で読んでいたけれども、漢点字を読むようになってからは、左手でしか点字を読めなくなってしまった」と話していた。日野市立図書館の中山さんや町田市立図書館の田中さんなど、公共図書館で働く、いわば読むことのプロといってもよい視覚障害の職員に尋ねてみたところ、みな点字は右手を中心に読んでいるという。緑図書館の利用者何人かにも聞いてみたが、いずれも右手という答えが返ってきた。盲学校や中途失明者の点字指導に当たって、例えば点写（左手で点字を読みながら同じ内容の点字を右手で打っていくこと）を想定して左手で読む指導をしているところもあるらしいが、どうやら、多くの点字触読者が仮名点字を右手中心で読んでいるようなのだ。ではなぜ岡田さんは漢点字を左手で読むのか。仄聞するところによると、関東漢点字研究会の会長である平塚盲学校の船越先生も左手で読んでいるらしい。

こうした問題にある仮説を提出してくれるのが、認知心理学という分野である。

失読ないしは難読と呼ばれる症状が日本人に現われる場合、読みの障害が漢字と仮名のどちらか一方に現れるという症例がしばしば報告されているという。例えば「やり」「つめ」などの仮名が読めないのに、「蟹」「刺青」などが即座に音読できる例があるという。その原因の一つとして、仮名書きの語の処理に関しては大脳の左半球優位を示すデータが多く、漢字の処理に関しては、一概には言えないにしても条件によっては右半球が優位であるというデータがあるらしい。

失読症というのは、脳の損傷に起因する書字言語の理解（解読）および音読の障害で、失語症や失読失書の部分症状として現われるものと、失読のみが孤立して現われる純粋失読などがある。一方失語症というのは、大脳の特定の領域（「言語野」または「言語中枢」と呼ばれ、大多数の人の左半球にある）が種々の病変（脳血管性障害、頭部の外傷、脳腫瘍など）によって、既得の言語表象機能に障害をきたした状態をいう。概念・思考内容を言語という特殊な符号体系に変換し、この符号体系によって伝達される情報内容を解読する機能の障害が失語症の中核となっていて、通常、音声言語と文字言語の理解と表出（聞き、話し、読み、書く機能）のすべての側面が大なり小なり障害される。

認知科学の分野では失語の研究において、まだ漢字

と仮名の解離現象についての十分な整理がついていないという。しかし様々な実験が行われており、実験心理学的な分析がなされている。例えば「漢字仮名交り文と仮名文の読書速度の比較」という実験では、ことわざを漢字仮名交り、仮名連続書き、仮名分かち書きの3通りで表記したものを被験者に与え、その中に誤りがあるかないかを探させるという方法で黙読の速度を比較しているが、その平均反応時間は、漢字仮名交り文が一・七三秒、仮名分かち書きが二・〇二秒、仮名連続書きが二・一八秒と漢字仮名交り文が最も読みやすいという結果が出ている。これが音読の場合にはどうなるかという実験では、漢字仮名交り文一九・六秒、仮名分かち書き文一九・五秒、仮名連続書き二〇・三秒、無意味漢字仮名交り文二四・五秒、無意味仮名分かち書き文二二・七秒、無意味仮名連続書き文二九・一秒と音読では漢字仮名交り文の優位性は無くなる。音読潜時（語を提示してからそれを声を出して読み上げるまでの時間）を測定すると仮名よりも漢字の方が一貫して長くなる。また絵と語とが一致しているか否かを判断させるマッチング課題では、音読に際して見られる、平仮名の漢字に対する優位性は消失する。

さらに「漢字と仮名の語彙性判定課題における左右差」という実験では、四字からなる平仮名語の場合、右視野に提示されたときの方が左視野のときよりも、語を語と判定する語彙性判定の速度が速く、一方、漢字一字の名詞と、ある漢字の偏を別のものと入れ替えて作った偽漢字とを用いて、同じ実験を行うと、今度は非語（非字）を非語と判定する時間に明瞭な左視野優位がみられた。これは「仮名は右視野―左半球優位であり、漢字はその反対に左視野―右半球優位である」という仮説を裏付ける新しい事実であるという。ところが一字漢字の替わりに二字漢字を用いると右半球の優位は消滅してしまい、仮名については比較的一貫して左半球優位であるのに対して、漢字の場合には左半球優位になることもある。しかし、様々な実験は、漢字と仮名の差が神経学的な基礎をもつものであることを明確に示しているという。

こうした様々な実験の結果得られた漢字と仮名の認知的特徴は以下のようなものであるという。

（一）漢字の方が仮名よりも同定されやすく、この傾向は漢字の複雑さが増すほど増大する。また仮名の方が漢字よりも速く視覚的に探索できる。これらの事実は漢字と仮名の視覚的分析過程では、形態としての複雑さが認知の効率に影響する。

（二）ある意味カテゴリーに属する語を他の語群から視覚的に探索するという事態では漢字表記の方が仮名

よりも速く探索できる。これは漢字の意味の把握が仮名よりも速くできるという仮説を指示するものである。

（三）語を単独で提示したとき、空白のある文を読ませたあと、空白部分に該当する語を与えて音読させた場合、漢字の潜時の方が長くなる。

（四）ある語がその空白部に適切かどうかを判定する時間に関しては漢字の方が速い。このことは音読に比べて意味的処理の速度は漢字の方が速いという仮説を指示する。

（五）漢字は仮名に比べて記銘の際に音韻的符号化に頼ることが少なく、見ただけでも意味が分かる。

（六）失語・失読症の症例から見て、漢字と仮名の認知的処理が全く同じ道筋でなされているのではない。

（七）大脳両半球の機能差に関しては、仮名の左半球優位という事実が多数報告されている。漢字については左右の機能差を認めないものと、右半球優位を示すもの、それに若干の左半球優位を示すデータとがある。漢字に関して、視覚的形態処理の側面の強い課題では右、言語的処理の強い課題では左という説もある。しかし、これらの事実も少なくとも漢字と仮名の処理はどこかに違いがあるということを明確に示唆するものである。

これを日本語読語過程の諸特徴として要約すると、仮名よりも漢字の方が、一、視覚的分析が多少困難である。二、音韻的符号化の速度が遅い。三、逆に意味的符号化の速度は速い。また、神経心理学的事実として、四、漢字と仮名の処理のどちらか一方が選択的に障害を受けることがある。と四点にまとめることが出来るという。

さて、岡田さんが漢点字を左手で読むようになった経緯には以上のような大脳の働きが関係しているのではないだろうか。一方、前回ご紹介した六点漢字は音符号の組み合わせによって成立していた訳で、漢字とはいっても、あくまで音韻的符号として受容されるものなのではないか。それでは視覚による文字の受容と、触読による文字の受容という点ではどこがどう違ってくるのだろうか。出来れば認知心理学の分野で仮名点字と漢点字の触読に関する実験を行ってくれないだろうか。おそらく仮名と漢字に関する認知心理学的、大脳生理学的な受容の差異について新たな発見があるのではないかと期待するのだが・・・。

今回の小文は、御領謙著『読むということ』（認知科学選書五、東京大学出版会、一九八七）に全面的に依拠しています。興味のある方は是非ご一読下さい。

ご報告

【二台目の点字プリンタが入荷いたしました】

「あいあい基金」及び賛助会員諸氏のご協力を賜り、念願の点字プリンタを購入する事が出来ました。皆様の暖かいご支援に深く御礼申し上げます。

神奈川県ライトセンター、横浜市社会福祉協議会の二台のプリンター及び、本会所有の二台のプリンターを利用し、これからも皆様のご支援ご要望に応えるため努力していきたいと思っております。

漢点字訳のご要望がございましたら、ご連絡いただきますようお願い申し上げます。

〈九七年賛助会員ご芳名〉

大竹高雄様、小川宣二様、河村幸男様、木原純子様、今野亘様、関口常正様、武田幸太郎様、田崎吾郎様、徳義公明様、中村裕一様、福田明徳様、政井宗夫様、松村敏弘様、宮澤孝義様

【漢点字に関する取材を受けました】

去る一一月二七日、スイスのドキュメンタリー映画監督のペーター・ブックマン氏による取材がありました。氏は、漢字に関するドキュメンタリー製作の為、日本を訪れ、点字ではどのようになっているかについて本会を取材していかれました。

本国に帰った後、英語版・ドイツ語版を製作されるとのことです。

完成したらお送りいただけることになりましたので、届きましたら後日ご報告いたします。

矢 (やへん) …知　　弓 (ゆみへん)…強
原 (がんだれ)…圧　　今 (ひとがしら)
白 (しろ) …的
＊桜 (木の名) …杉　　松　　梅
＊菊 (草の名) …蓬　　萩　　葦
我 (ほこづくり)
式 (しきがまえ)…拭
用　　欠 (あくび) …歌

＊「色」のところで挙げた６つの字は、漢字の構造とは離れて、漢点字固有の文字となっています。「　」は、「色　」を表わしています。
＊「遊」は、「　」として之繞に用いられますが、先にも述べましたように、之繞は「進」、「　」を用いることになっています。しかし、之繞のある文字は沢山ありますので、この符号だけでは表現することが困難になりました。そこで、この「　」も之繞として用いることにしました。たとえば、「週　」「通　」の２つは、右側が同じになっております。これを区別する必要に迫られた結果です。したがって、「　」の符号は、「走繞」「延繞」「支繞」「之繞」と、４つの繞に用いられることになりました。
＊「桜　、菊　」は、漢点字の最初のマスにある場合は、「草冠、木偏、竹冠」として用いられて、植物の名前を表わす文字となります。

次に、これまで出て来た字に類似の字です。「似た字」という意味で、漢点字では「近似文字」と読んでいます。１マス目に「１、２、３の点」、あるいは２マス目に「４、５、６の点」のいずれかが入ります。

首 (頁)　　由 (田)
具 (貝)　　曲 (田)
州 (川)　　両 (雨)
未 (木)　　面 (目)
末 (木)　　句 (包)
本 (木)　　凶 (区)
巳 (己)　　引 (弓)
已 (己)　　旧 (白)
天 (大)　　必 (心)
太 (大)　　或 (我)
夫 (大)　　角 (用)
午 (牛)

これらの「近似文字」も〝部首〟として用いられます。

漢点字ってどんな字？　４

前号まで、漢点字は、漢字の〝部首〟を点の符号にしたものを組み合わせてできている漢字の点字であることをお話しして参りました。そして、この〝部首〟の数は２００を越えるので、漢点字では、同じ符号を幾つかの〝部首〟に対応させることになった、というところまでお話ししました。

このシリーズの初めには、主に「偏」「冠」「構」「繞」など、その字の性格や意味を表わす〝部首〟、次にその漢字の身体の部分であって、発音を表わす「旁」になる〝部首〟をご紹介しました。勿論これらの〝部首〟は、必ずしも「偏」や「旁」としてだけ用いられる訳ではありません。漢点字における分類でも、大まかに分けておく、という程度なのです。

今回は、これまで出て来た漢点字の点字符号が、また別の〝部首〟として用いられる場合をご覧いただきます。今回も「偏」や「繞」に用いられることの多い〝部首〟です。

君　…群
工　(こう)　…江
＊色　(いろの名)…赤
青
冬　(ふゆがしら)…終
虎　(とらがしら)…虚
魚　(うおへん)…鯨
牛　(うしへん)…物
豚
雨　(あめかんむり)…雲
居　(しかばね)…屋
冷　(にすい)　…次
米　(こめへん)…糖
支　(しにょう)…翅
＊遊　(しんにょう)…通
舟　(ふねへん)…船
将　(しょうへん)…状
夕　(ゆうべ)　…多
立　(たつへん)…新
足　(あしへん)…距
羽　(はね)　…翼
気　(きがまえ)…汽
区　(はこがまえ)…匠

川　(かわ)　…順
陸　(おおざと)
黒　黄
緑　紫
罪　(あみがしら)…買
鳥　(とりへん)…鶏
酉　(とりへん)…酒
羊　(ひつじへん)…美
谷　(たにへん)…俗
士　(さむらいのし)…吉
老　(おいかんむり)…者
衣　(ころもへん)…裕
延　(えんにょう)…建

王　(おうへん)…現
主　…柱
死　(しかばねへん)
身　(みへん)　…射
虫　(むしへん)…蛙
自　(みずから)…息
包　(つつみがまえ)…匂
山　(やまへん)…島

同報通信『雑談』より　3

毎回皆様から沢山の原稿を頂戴し、なかなか全てを載せきれないというありがたい状態が続いております。
今回は少し、時期が過ぎてしまったのですが、今年最後の機関誌ですので、二つをご紹介します。（宗助）

会員　西　淳策

これまであちこちで甘酸っぱい香りを放っていた、金木犀の花もいつしか終わって、芒の穂が風にそよぐ秋たけなわの今日この頃です。かって子どもたちの小学校の運動会へでかける往き帰りの金木犀の香りと、ござ敷きの家族席の弁当の時間に今年初めての青い蜜柑の新鮮な香りのひろがりとが、私の記憶にしっかりと焼き付いているようです。

これからはまたもうひとつ、別のことが加わることになりそうです。それは娘の海外旅立ちの日の朝のこと、なんと目を覚ましたのは、予定していた家を出る時間ではありませんか。一年の留学で荷物も結構な量で、両親も成田まで送る計画です。目覚時計のセットがまずかったのでしょう、うあ―大変！とばかり跳び起きました。ところが寝ぼけと、大あわてで階段を二、三段踏みはずしてしまったのです。痛いなどと云っている暇はありません。そのまま重い荷物をポンコツ（パソコンばかりではありません）車に積み込み駅まで急行、駐車場に入れて何とか間に合ったのです。打った腰の方は以来痛んで膏薬なんかでなんとかごまかしていたのですが、ここにきて急に寝起きや立ち居に痛さが我慢できなくなり、ついに昨日から医者通いという有りさま。でも骨は大丈夫のようで、注射が効いたせいか今日あたりは大部楽になっています。

実は本題は別のことにあります。十年以上飼っていた猫（かって「雑談」で紹介したこともある、十kgもの）が数日来から弱ってきて、臨終の時を迎えつつあったのです。たかが猫（オラちゃんごめん）ですが、子供達にとって、悩みや苦しみの時々に慰めとなってきた、かけがえのない存在でした。娘は準備のこともあり、ここ数日殆ど眠っていません。出発の時間が迫っているというのに、猫から離れようとしないのです。翌日、猫はあの世に往きました。子供達との思い出が重なっていたし、家内は大泣きでした。

その日は金木犀の香りが特に強かったような気がします。

（十月九日記）

猫の死に月冷たきやこぼれ萩

あゝモンブラン

「奇跡ですよ、あなた方は」。シャモニーで早朝モンブラン見物に、ロープウエイの駅に向かう途中に出会った日本人のグループの人が発した言葉です。我々夫婦がこの街についたのは雨模様だった前の日の夕方でした。今朝はうってかわっての上天気に恵まれての登山行です。この親子夫婦四人はシャモニーに来て三日間天候が悪く、氷河見物以外はおみやげの買物などで時を過ごしていたとのことです。航空券の期限で今日が最後の日とか、それが見事に晴れて、親子夫婦お互いによかったよかっと喜びはひとしおの様でした。

話では一週間滞在したが、昨日で期限がきて、涙をのんで帰国した人たちもいたとか、昨日ついたばかりで今日登れるなんて「あなた方は本当に運がいい」と繰り返し連発。何か申し訳ないような気になりました。実際、明け方ホテルの窓を開けて、真っ青な空を背景に仰ぎ見える白雪の山岳が、朝日でバラ色に輝いているのを見た時は、やったと跳び上がらんばかりでした。

今度の旅行ではフランス中部を歩いて、予定には入れていなかったアルプス観光。特に前からモンブランを見たかったので、終わりに近くなったこの際、ということで六月二四日ダフニー地方から約八時間の旅で夕方八時頃シャモニーに到着。早速二つ星（★★）のホテルを探し、表の値段表を確かめて飛び込んだのです。フランスは夏時間ということもあり、最も日が長いこの頃は八時はまだ日が輝き、十時頃にやっと暮れます。七、八月のバカンスの頃と違って、どこの地域もホテルは例外なく空いているので、全て飛び入りOKなんですね。偶然入ったホテルのマネージャーは、父親が韓国系だが日本育ち、久しぶりの日本語で、いろいろと山に関する話を聞くことが出来ました。

それによると、この所ずっと雨（山は雪）だったが、明日だけは晴れて明後日以降、また天候が悪くなるとのこと。日韓からの取材陣と日本のトップクライマー（登山家）二人が逗留しており、それなりの天候観測である由。「好いときに来られましたね」と嬉しいことを云ってくれたのです。これ以上の情報はないわけですから、シメタとは思ったものの、ホントかネと半信半疑でもあったのです。

旅行中ホテルは経済的に二つ星を主に選んでいました。格式では上級から比べれば、確かに劣りはしますが、お湯の出や排水が悪いところはなかったし、殆ど問題はありませんでした。その点では、フランスはキチンとしているなあというのが全般の印象でした。一

般的に二つ星は、ツインルーム二人で三〇〇フラン付近、つまり六〇〇〇円前後です。食事は別ですが、日本に比べてこれに関しては確かに安いですね。参考までに物価は日本と比べて決して安くありません。

久しぶりの快晴ということで、早くから続々と大勢の人達が乗場に詰めかけ、切符売り場に並び始めていました。だいぶ待たされた後、大多数が雪山登山の格好をした人達に混じって、ロープウエイで一路標高三八四二mの切り立った山上の展望台へ。シャモニー市街が海抜約一〇〇〇mのところにあるので、途中乗り継ぎがあるものの、垂直に近いロープを高度差二八〇〇mほぼ一気に、かなり速いスピードで登ってゆくのです。スリル満点だし、どんどん空気が薄くなってくるのをはっきりと感じます。頂上駅についてから先方より、高山病でタンカに乗せられて運ばれているのを見かけました。なにしろ歩くと胸がドキドキするので、ゆっくり歩かないと危険なのです。

展望台までの歩き始めに、峯と峯をつなぐ雪の積もった橋を渡らなければならないのですが、雪混じりの強風が吹きさらしとなっていて、その寒さに思わずたじろぎました。マイナス三℃と表示されていましたから当然で、渡った後しばらくはガタガタしていました。登山組はここで装備を整え、ロープに連なり、ピッケルやスキーストックを片手にいざ雪中へと出発です。いや、こちらは感心している場合ではありません。フランスは夏でも朝・夜は冷えることを予想し、薄いセーターを一枚、あとは春用ジャンパーの用意しか無く、半袖など重ね着してきたものの、全く場違いの出で立ち、なんたる無計画。吾が奥さんはここでもトイレへ（節目には必ずです）。おかげでトイレ内が暖房で暖かいことが分かり、私も用は足さなくともと、入って窓の外を見たら眼前に白銀の山々が迫って見えるではありませんか。う〜んこれはすごいとばかり、そこでしばしの観望となりました。後から来た外国人、いえフランス本国人？も加わる始末。いつまでもそこにいるわけにもいかず、意を決して、展望台へと向かったのです。

足を踏みだしたとたん、想像していたよりはるかに迫力あるアルプスの鋭鋒群に圧倒されました。ひときわ高いアルプス最高峰のモンブラン（四八〇七m）。その名の通りの白い頂が悠然と他を圧して聳え、数々の名峰がぐるりと近くにも、また遥か遠くにも連なっているのです。そこに日本人のグループもいて、前に来たときは霧で見えなかったとか、それぞれ感動が開けっ放しでした。日も高くなったせいか気温が上がってきたのでしょう、それにまた興奮も手伝ってか、寒

さもだんだん和らいできていました。

展望の場所は他にもいくつかあって、幾重にも雄大な景観を堪能できました。そして最後の極め付きは、イタリア側にかけてほぼ水平に延びたロープウェーが動き始めたのです。麓では運転休止ということでしたが、全くついています。切り立つ山々を縫い、広大な雪渓の上をゴンドラが行くのです。まさに絶景と云って良いでしょう。下に見える雪渓にはクレバスがいくつも深淵を覗かせ、それらから離れて小さな黒い点が連なります。先ほどの登山グループ群の内の一隊です。その点の小ささは逆にスケールの大きさを実感させます。また「案内人無しに登山をしないように」との呼びかけが納得できました。知らずにクレバスに足を踏み入れたらお陀仏ですからね。

帰りかけたときでした、さっきの橋の辺りで白杖の若い女性が、親御さんでしょうか、付き添いのもとに、歩いていたからです。えっ、アルプスを見に！目には見えなくとも、薄く引き締まった冷気、雪混じりの風、強く紫外線に富む肌にささる日の光、人々の動きと感嘆のざわめき、そしてとりまく自然の静寂とかすかな響き、研ぎ澄まされた第六感が働くのでしょう。そう、その場にいて初めて得られる感動、経験ない者が画く想像の範囲はこの人に遠く及ばないのではないでしょうか。実際のあっと息をのむ臨場感は、前に見ていた写真などとは遥かに隔たりがあることを、まさに実感したからです。

予報通り午後からだんだん雲がでてきたし、疲れもあって昼食は下でと、早めに地上に降りました。ちょうど水泳の後のようなホットした気だるさが身体に感じられたのは、おそらく同様に、心臓がかなりの負担から解放されたためでしょう。呼び物のもうひとつ、氷河見物には充分時間があったものの、省略して午餐をとって（中華です！）ゆったりとくつろぐことにしました。それに上の方から氷河の一部も見えましたしね。

今回の拙文はアルプスだけに限ったわけですが、出たとこ勝負の旅だけに、三週間にはいろんなことがありました。この三日後のフランス最後の日はパリに戻って、翌朝ドゴール空港へと帰国の途についたのです。

マロニエに旅の終わりや巴里の雨

となりのシロー君(4)

〝主〟はじっとしていて動かない

これらは身体の部分を絵にしてそれが字になったんだ

そうなのじゃあね、今度は前に出てきた字で〝旁(つくり)〟をみましょうか

この字の右側は全部〝主〟という字よね

駐 住 柱
註 注

漢点字では ⠼⠍ になるの

ああ〝しゅ〟だ王さまの上に点がちょんて付いてるのよ

ちょん

王

王さまの王って漢点字でどんなの？

⠼⠍ よ

漢点字も〝王〟と〝主〟とは似てるんだね

王 ⠼⠍ ↑

主 ⠼⠍ ↑

さあこの〝主〟という字だけど王さまではなくて明かりをともした台のかたちなのつまり上の点がともし火で下の王のようなところが台なのね

へえ、似た字でも本当は全然違うんだ

音は〝しゅ〟意味は〝じっとしていて動かない下から支える、そこにとどめておく〟なの分かるかな？

だから〝柱〟は木でできていてしかも動かない、支えるものつまり〝はしら〟なのね

柱

〝住〟は一所に住んで動かない
ポイ
住
〝駐〟は動いているものを止めるところね
駐
なるほどふむふむ
あれヘンだな〝注〟は逆に動くよ水を注ぐでしょ？お茶を注ぐっていうのもこれだよね？
注
いいところ突くわね
でも水もお茶も、ほらじっと同じところに注ぐでしょう
水の柱
みたい
注目
注意
あつそ…
〝注〟には一所に流れ込む集まる、とどめるの意味があるの
この字には〝註〟と同じように〝書き留める〟という意味もあるのよ
註
注釈（註釈）
脚注（脚註）なんかそうね
なんか、すごーくむずかしくなって来たね
それじゃもう一度言うわね
木がとどまってささえると柱ではしら（音はチュウ）
人がとどまると住ですむ（音はジュウ）
馬がとどまると駐でとめる（音はチュウ）
水が続れ込む、集まる（集めて）とどめると注でそそぐ（音はチュウ）

言葉をとどめると註でとめる(音はチュウ)
この字は〝注〟を使うのが普通だけど
漢字がきらいになるのってこのへんからかなー
え？ みきちゃん漢字きらいなの？
ときどきね
ぼくはだいじょうぶおもしろいよ
この5つの字は左の偏と右の旁と両方の意味を合わせたものだからその意味では〝会意文字〟ということになるの
旁のいみ
偏のいみ
でも音は旁から来ているので〝形声文字〟でもあるのよ
チュウ ジュウ シュウ
やっぱりむずかしい！
うん、むずかしいよ漢字ってむずかしいね
忘れてもいいのよ必要な時に調べて思い出せばいいのよ
ほ
字の形や漢点字を教えてもらってそれを覚えておけば思い出せるかな
でもいつのまにか覚えちゃったようにも思うなだって〝木、人、馬、水、言〟が左にあって〝主〟が右にあるだけでなんとなく似た意味の字ということは分かったものね！
来年につづく…

代表インタビュー　5

今回は、漢点字について、素朴な質問からさせていただきます。

編集部　私たちには、今一つ分かり難いことがあります。それは、従来のかなの点字と、私たちが点訳を行なっております漢点字の点字と、実際にはどのように違うのかということです。従来の点字には漢字がない、漢字を点の符号にしたのが漢点字だ、ということは分かりました。しかし、点字の文章（漢点字のそれも含めて）を、文として読むことのできない私たちに、従来の点字と漢点字がどのように違っていて、どうなければいけないか、もう少し話して下さい。

岡田　おっしゃることはこれまで申し上げて来たことですし、特に異論のないところだと思います。墨字のオリジナルのテキストの情報を、できるだけ触読文字の文章に反映させようというのがこの漢点字です。従来の点字と大きく違うのは、その意味で、レイアウトそのものだと思います。

編　触読文字として、基本的に違うのですか？

岡　同じと言えば同じですし、違うと言えば違うと思います。何処が違うかと言えば、漢字の点字を用いるということ、それに伴って文章全体の割り付け、構成が、従来のかなの点字文とは異なっております。

編　明治以来のかな文字の分かち書き体系と漢字仮名交じり体系ですね。しかし、触読のし易さというところから、歴史的には前者が選ばれたのではないでしょうか？

岡　そういう言い方をされることが多いようですが、当時は点字の漢字の体系が存在しなかったのですから、どちらが良いということで選ばれたのではないでしょう。

編　かな点字の文章と、漢点字の文章の、実際的な違いをお願いします。

岡　漢点字では、まず、分かち書きがありません。そして、従来の点字では、単語の中途で行が変わることを嫌いますので、その単語は次の行の頭に移されます。そのために、行末には幾つかのスペースが入ることになって、上下の行末は、でこぼこに不揃いになります。反対に漢点字では、そのようなことはなく、墨字と同様に、単語の途中で次の行の頭に移っても一向に構わないのです。ですから行頭も行末も、上下がそろっています。

編　そうしますと、書き出された文章としては、墨字と同様に、全体に文字で埋まっているのですか？繰り返しになりますが、それは読み難くはないのですか？

岡　従来の点字と比較しますと、ずっと詰まったよう

に感じられると思います。読みにくいかもしれません。しかし、読み方が違って来たな、というのが私の感想ですし、従来のかな点字と漢点字の文では、同じ文であっても中身は全く異なった、似て非なるものというように感じられます。

編　墨字のオリジナルの感触を、漢点字訳された本にもできるだけ反映させたいということですね。

岡　そうです。そこが非常に大事なところだと思うのです。私自身、墨字の割り付けがどのようになっているのか、ほとんど知らずにおりました。これまでの点訳書などには、機械的に済まされていて、十分写し取られていなかったからだと思うのです。新聞などを見ますと、見出し、囲み、小見出しなど、記事の内容をちょっとつまんだようなものが幾つかあります。これらは、従来の点字では、表現し切れていなかったのだと思いますし、私も時どき「おやっ」と思わされることがあるのです。現在の本会の活動では、そのようなものをどう理解して、漢点字の点訳に反映しようかということが、大きな課題になって来ているように思われます。

編　それでは、見出しや囲みなど、点訳する際、どのようにお考えですか？

岡　川上先生は、漢点字をお作りになりましたが、文中のかなについては、従来の点字の表記に準ずるとして、特に何もおっしゃいませんでした。同様に、分かち書きをしないという以外、レイアウトに関しても、特に何もお残しになりませんでした。しかし、漢点字訳を進めて参りますと、色々問題が起きて参りました。その一つが見出しです。従来は、見出しの大きさに添って、行の中程から二マスづつ行頭に寄せるという方法が採られておりましたが、本会で漢点字訳をするに当たって、墨字のオリジナルを参考に、どのような割り付けにするか、その書物にそれぞれのルールを作って、それに添って漢点字訳していただいております。先にも述べましたように、できるだけオリジナルに触れようと言う工夫です。従来の点字の割り付けでは、aという本もbという本も同様の扱いになるような場合でも、本会の漢点字訳では、それぞれ別のルールを考えますので、必ずしも同じような割り付けにはなりません。つまり、従来の点字書は、どれも同じような顔をしていますが、本会が作る漢点字書は、それぞれ別の顔を持つようにしたいと思っているのです。

編　ありがとうございました。

手配師のあくび気になる神無月

日夏亜里夫

作者、亜里夫氏は山谷（ｻﾝﾔ）俳句会の同人。　神無月、陰暦十月のこと。
「あーあ、暮というのに手配師があくびしているようじゃ今日もあぶれか」と嘆きのつぶやきが聞こえてきますね。リストラのしわ寄せが弱い人たちに行くことのないように祈ります。（朔）

おい癌め　酌みかはさうぜ秋の酒

江國　滋酔郎

江國　滋さんがこの夏、癌で亡くなった。軽妙洒脱という言葉そのままの句をつくるひとだった。上の句は亡くなる２日前に「敗北宣言」と前書きしての辞世句となった。
合掌。(朔)

編集後記

本年最後の機関誌です。本号では、現場で独自の漢字教育に取り組んでおられます、江戸川区の小学校教諭の伊藤邦博様、賛助会員の小川宣二様に原稿を頂戴いたしました。また、毎号原稿をお寄せ頂いている皆様、ありがとうございます。この場を借りて、全ての皆様に深く御礼申し上げます。
今後もテーマに拘わらず原稿を募集いたしますので、よろしくお願い申しあげます。

本文中にもご紹介しておりますが、漢点字訳の定期購読、その他漢点字訳ご希望の書籍がございましたら、是非ご連絡下さいますようお願い致します。

＊＊＊　良いお年をお迎え下さい　＊＊＊

次回の発行は二月十五日、テーマは「私にとってボランティアとは」です。
ご意見・ご感想をお寄せ下さい。

ＴＥＬ・ＦＡＸ　０４５（２６１）１７２３
宗助　悦子

連載　EIBRK漢点字変換システムについて(5)

木下　和久

前回はオプションによる条件設定と、ページ行の編集について説明しました。今回は、点字の表示について、少し詳しく説明しましょう。

1．点字用の外字について

EIBRK システムでは、点字変換した結果を画面上に表示するのに、パソコンのグラフィックモードを利用しています。一方、テキスト文の中に点字を直接入力したいときは、一般的にはいわゆる外字を使用します。これは一太郎などのワープロソフトでは利用できますが、MS-DOS ではこの外字の利用が困難で、すべての点字を外字で表示することができません。さらに、一太郎で使用する外字コードは、システムの内部ではバージョン４と、それ以上の新しいバージョンでは扱い方が異なっています。そのために、テキストファイルに点字をあらわすための外字を使うにはいろいろの注意が必要になります。

点字変換された文章を、点字印刷されるイメージで墨字プリンターで印刷するために変換されたファイルを作るのが、EIBRK システムのメニューの７と８にある「一太郎文書への変換」です。ここで「.TXJ」という拡張子のついたファイルを作ると、一太郎で読み込んだときに、変換された点字が外字を利用して点字の形で表示されます。そして、そのまま墨字プリンターで打ち出すことができるのです。このメニューの７と８の違いが、上で述べた点字をあらわすための外字コードの違いなのです。

メニューの８でできるのは WINDOWS 用のファイルで、ここで変換された TXJ ファイルは、WINDOWS95 で動いているプログラムなら、一太郎はもちろんですが、その他のエディタなどでも点字用の外字が利用できるようになっています。しかし、そのためには外字ファイルが適切に登録されている必要があります。これはやや面倒ですが、これが利用できるととても便利なので、そのやり方を後で詳しく説明します。

2．WINDOWS コンピュータでの EIBRK システムの利用

もともと EIBRK システムは、MS-DOS コンピュータで作動するように作られたものです。しかし、最近のコンピュータはほとんど WINDOWS を OS にしており、MS-DOS モードは、その中の特殊なモードとなってしまいました（以後 WINDOWS は「95」を指します)。

WINDOWS が立ち上がった中で、「スタート」ボタンから「MS-DOS プロンプト」を選ぶと、小さな黒い DOS の画面が現れます。これを「DOS 窓」といいます。ここで、EIBRK のインストールや、本格的な変換作業を実行することができます。しかし、この DOS 窓は WINDOWS のシステムを通して動いているので、グラフィックの動きが非常に遅くなります。つまり、変換された画面の表示が遅いのです。これは実際にはとてもいらいらすることなので、お勧めできません。

そこで、お勧めは最初のスイッチを入れたときに、WINDOWS を立ち上げないことです。そのためには、スイッチを入れて、しばらくすると「WINDOWS95 …」という文字が現れますので、そのときに f.8 キーを押します。そうすると、何種類かのモードを選択するようになりますので、「コマンドプロンプトのみ」というモードの番号を選びます。ここからは通常の MS-DOS と全く同様に、しかもとても速く気持ちよく動いてくれます。このプログラムを終了した後に WINDOWS を立ち上げたいときは、WIN ﾘﾀｰﾝとすれば、通常の WINDOWS が立ち上がります。また、逆に WINDOWS から MS-DOS モードに切り替えるには、WINDOWS の終了の画面で、「MS-DOS モードで立ち上げる」を選んでも同じようにうまく行きます。

３．「外字コード」の選択

漢点字に変換することを目標に入力されたテキスト文の中に、直接点字をあらわす外字を入れたい場合、前述のように入力に使用するコンピュータの環境によって外字のコードが異なるので、漢点字への変換の際にどの種類のコードが使用されているのかをコンピュータに知らせる必要があります。この選択は、EIBRK の画面で f.9 のオプションの「外字コード」で行います。この「外字コード」は３種類あって、１は一太郎のバージョン４、２は一太郎その他、WINDOWS で動くプログラム用で、３はちょっと特殊な 16 進コードとなっています。

この「16 進コード」は、数字とＡからＦの英字(大文字でも小文字でもよい)の組み合わせ（16 進数）で 16 種類の点字をあらわすものです。この 16 種類の点字と 16 進数との対応は、EIBRK の表示画面の下に常に表示されているものです。１マスの点字は２つの 16 進数であらわすことができます。この場合、本来の英数字と区別するために、本来の英数字は必ず全角文字で入力し、点字をあらわすための 16 進数は半角文字で入力します。このように入力したテキスト文では、そのままでは点字の形が見えません。これは多少不便ではありますが、点字用の外字が

使えない環境で直接点字が入力できるという大きな利点があります。したがって、「一太郎」に限らずワープロ専用機や、後で説明する一般のエディターでも、16 進コードを使用すれば直接点字を入力することができるということになります。

入力されたテキスト文の中に点字をあらわす 16 進コードが含まれている場合は、変換する際に必ず「外字コード」を３にしておいてください。この場合、もし「外字コード」が３になっていないと、16 進コードは一般の英数字とみなされて、自動的に全角の英数字に変換されてしまいます。また、点字が一太郎の外字で入力されている場合は、漢点字変換の際には自動的に正しく変換されますので、「外字コード」が適切でなくても変換は正常に行われます。しかし、変換した後でテキストセーブをすると、指定された「外字コード」のテキスト文ができてしまいますので、予想外の結果が得られるかもしれません。

４．WINDOWS95 への外字ファイルの登録

WINDOWS 用の外字ファイルは、TBGAIJ.TTE と TGGAIJ.TTE です。前者は、点のないところに小さな横線を入れて、点の位置をわかりやすくしたもので、後者は点のないところには何もないようにしています。実際に印刷された点字のイメージに近いのは、後者ですが、点字そのものをチェックするには前者のほうがわかりやすいでしょう。これらのファイルは、標準的な EIBRK システムのファイルのセットには含まれていません。必要な場合はお申し出ください。

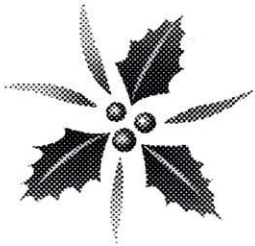
外字ファイルの登録は、「スタート」ボタンを押してプログラムの中から「アクセサリ」の「外字エディタ」を選びます。このプログラムが立ち上がったら、「ファイル」の中の「フォントの選択」を選びます。「外字フォントの種類」が「標準の外字」となっていますので、「書体を意識した外字」に標識を移します。そうすると、「関連付けるフォント」のリストが有効になります。この中で、印刷などに使うフォントの種類を選びます。通常は「ＭＳゴシック」や「ＭＳ明朝」などでしょう。これらの一つを選んで「変更」をクリックすると、「外字ファイル名の変更」の画面になり、ファイルを選ぶようになります。ここで先ほどの TBGAIJ.TTE または TGGAIJ.TTE のあるフォルダーを選んでダブルクリックすると、目指すファイル名が出てきます。「ファイル名」の欄に目的とするファイル名が入ったら、「保存」ボタンをクリックします。そうすれば、ここで選んだファイルが、先に選んだフォントに割り付けられます。

これは、必要とするフォントすべてに割り付けておかなければなりません。これは面倒なようですが、これをうまく利用すると、明朝体の印刷のところでは横線付きの点字が印刷され、ゴシック体のところでは横線なしの点字が印刷されるというような芸当ができることになります。

５．一太郎とエディタ

漢点字変換に使うテキスト文の入力には、一太郎のバージョン４を使うことを標準としています。これは、直接点字を入力するのに使う外字ファイルが扱いやすいからです。すでに説明したように、WINDOWSでも適切な方法で外字ファイルを登録すると、点字用の外字が利用できます。ということは、一太郎はバージョン４に限らないということです。

ところで、一太郎をお使いの方は常々感じておられるでしょうが、バージョンが上がるごとに全体の動きが遅くなる傾向があります。これは、いろいろ複雑な機能を盛りだくさんに取り入れる結果なのですが、われわれが必要とするテキスト文は、それらの盛りだくさんの機能のほとんどすべてが不必要なものなのです。そういう余分な機能を外して、軽快に動くテキスト文入力の専用ソフトが、エディタと呼ばれるものです。

最近の MS-DOS には SEDIT（エスエディット）というスクリーンエディタが標準でついています。これでも十分に使えますが、あまり大きなファイルは扱えないなど、若干の不便さがあります。EIBRK のファイルセットには JX というエディタが入れてあります。これは、相当高機能なフリーソフトウェアで、使い慣れるととてもよいものだと思います。このソフトの使い方については、同じファイルセットにある JX.DOC を参照してください。

私は、WINDOWS のコンピュータでは「秀丸」を愛用しています。これからはテキスト文の入力はエディタでということを標準的な方法と考えたいと思います。